

令和 6 年 5 月 31 日現在

機関番号：16401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K11308

研究課題名（和文）明治期から高度成長期における日本野球界の体罰・しごき・上下関係の実証的研究

研究課題名（英文）An empirical study on corporal punishment, hazing and hierarchy in Japanese baseball world from Meiji to High economic growth period

研究代表者

中村 哲也（NAKAMURA, Tetsuya）

高知大学・教育研究部総合科学系地域協働教育学部門・准教授

研究者番号：10712284

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：明治期から現代まで、野球を中心とした日本スポーツ界において、体罰やしごき、上下関係等の実態とその変化、それが発生・拡大・激化するようになった構造的要因について、歴史学的手法に基づいた実証的な研究を行った。上記の課題を解明するため、選手の自伝・回想録や、高校（旧制中等学校）・大学の野球部史・学校史、社会人・プロ野球チームの球団史などの史料を網羅的に収集・分析した。その結果、日本スポーツ界の体罰は、学校を中心とした運動部の組織化とそれを基盤とした大規模な大会の成立、スポーツによる進学・就職、競技人口の拡大、競技レベルの上昇等の構造的な要因によって発生・拡大したことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究により、日本スポーツ界の体罰・しごき等の実態やその歴史的变化、およびそれらが発生する要因となっている日本スポーツ界の構造的課題点を明らかにするとともに、それらを軽減・根絶するために、1校から複数チームの大会出場、合宿所の廃止・環境整備、選手の移籍しやすい環境・ルール作り等の対策が有効なことを指摘した。

2023年12月、本研究の成果をまとめて『体罰と日本野球 歴史からの検証』（岩波書店）を刊行すると、多くの新聞・雑誌で書評やインタビュー記事が掲載されたり、ラジオ番組に取り上げられたりするなど、多くの反響を呼んだ。また、第33回高知出版学術賞にも選ばれるなど、社会的注目を集めた。

研究成果の概要（英文）：We conducted empirical research based on historical methods on the actual conditions and changes of violence, discipline, hierarchical relationships, and the structural factors that led to their occurrence, expansion, and intensification in Japanese sports, particularly baseball, from the Meiji era to the present day. In order to elucidate the above issues, we comprehensively collected and analyzed historical documents such as autobiographies and memoirs of players, histories of high school (former secondary school) and university baseball clubs and schools, and team histories of non-professional and professional baseball teams. As a result, it was clarified that violence in Japanese sports occurred and expanded due to structural factors such as the organization of school-based athletic clubs and the establishment of large-scale tournaments based on these clubs, the expansion of the population of players, and employment through sports, and the increase in the level of competition.

研究分野：スポーツ史

キーワード：体罰 しごき 上下関係 野球 体育会系就職 スポーツ史 体育史 スポーツ社会学

1. 研究開始当初の背景

日本のスポーツ界において、体罰やしごき、厳格な上下関係がどのように発生し、拡大してきたのかという問題は、長年にわたり議論の対象となってきた。特に、2012年末に発生した桜宮高校バスケットボール部事件以後、日本スポーツ界における体罰問題は、一般社会も含めて強く関心を持たれるテーマになっている。

しかし一方で、日本スポーツ界の体罰問題に対する実証研究は不足しており、体罰の実態とその変化、体罰が発生・拡大する要因等について、具体的に明らかになっているとはいえない状況がある。このような背景のもと、本研究は日本野球界を中心に、体罰・しごき・上下関係の発生・拡大の要因とその影響を歴史的かつ構造的に解明することを目指して研究を開始した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本野球界における体罰・しごき・上下関係の実態と、その発生・拡大に寄与した構造的要因を歴史学的視点から実証的に解明することである。これにより、現代の日本スポーツ界が抱える問題を根絶するための政策提言の基盤となる知見を提供することを目指す。具体的には、以下の課題に取り組む。

体罰・しごきの実態の解明：どのような状況で体罰やしごきが行われていたのか、その具体的な実態を明らかにする。

部・チームの上下関係と活動実態の分析：体罰やしごきがどのような組織構造や活動形態のもとで発生・拡大したのかを分析する。

野球界の状況変化とその要因：野球界全体の変化と、それをもたらした社会的・政策的背景を探る。

これにより、日本スポーツ界の体罰・しごき・上下関係の問題を歴史的・構造的に解明し、これらの問題の根絶に向けた具体的な方策を提案することを目的としている。

3. 研究の方法

本研究は、以下の方法を用いて進められる。

史資料の収集と読解：明治中期から高度成長期にかけての野球関連の史資料（記念誌、回想録、新聞記事など）を収集し、詳細に分析する。これにより、各時期の体罰・しごき・上下関係の実態を具体的に把握する。

時期区分による分析：

- 1) 前史（1890-1910年代）：体罰やしごきの萌芽期。
- 2) 発生期（1920-40年代）：体罰やしごきが顕在化し始めた時期。
- 3) 拡大期（1950-70年代）：これらの問題が広範囲に拡大した時期。

多層的視角の導入：体罰・しごき・上下関係を、個人レベル、組織レベル、社会・政策レベルの相互作用として捉え、各レベルでの要因とその連関を分析する。

国際比較：日本の事例を国際的な文脈に位置付けるため、他国のスポーツ界（例：韓国、イギリス）の体罰・暴力問題に関する対策や事例と比較する。これにより、日本の問題をグローバルな視点から再評価し、普遍的な解決策を模索する。

本研究を通じて、日本スポーツ界における体罰やしごきの歴史の実態と構造的背景を明らかにし、現代のスポーツ界が直面する問題への具体的な解決策を提供することを目指した。

4. 研究成果

1) 明治期の野球部員たちは、自主的に規則違反者に制裁を加えたり、試合で乱闘を起こすことがあったが、先輩・後輩の厳しい上下関係はなく、選手自治による運営がなされていた。彼らは学校のプライドをかけて対外試合に挑んではいたが、学業も重要だったことに加えて、野球による進学・就職等のシステムが存在していなかったため、部内での体罰は行われていなかった。

2) 体罰が野球界で発生するようになったのは、全国中等学校優勝野球大会や東京六大学リーグ戦が創設され、競技レベルが高まった1920年代以降であった。その要因となったのは、メディアの報道による社会的関心の高まり、野球の実力に基づいた進学・就職、プロ野球の創設等の社会環境が整備されるなかで、野球部内では監督主導で厳しい練習や試合が行われるようになり、試合での勝利を目指して監督が選手に体罰を加えたり、部内の規律維持を目的にして上級生が下級生に体罰を加えるようになった。

3) 戦後から高度成長期にかけて、高校・大学野球部内の体罰はさらに激化・拡大した。これは野球ブーム、ベビーブームによる競技人口の増加、高度経済成長による進学率の上昇、私大の大規模化に伴う部員数の増加が主な要因であった。新入部員たちは上級生の練習手伝いや基礎練習に従事し、体罰に耐えられない者は退部に追い込まれた。体罰は上下関係や部の規律を維持し、実力に劣る部員を自発的に退部させる手段として利用された。その意味で、野球部をはじめとした運動部内での体罰は、効率的に部の秩序を維持し、強化することを目的にして歴史的に形成されたマネジメント方法であった。

4) 日本スポーツ界において、体罰が発生した要因として、旧日本軍の影響が強調されてきた。しかし、本研究により戦時中に軍隊生活を経験した指導者が復帰後に体罰を行使した事例はあるものの、部内での体罰は戦前から存在していたことを明らかにした。

5) 2010年代以降も日本スポーツ界では体罰が続いているが、近年は指導者による体罰の割合が増加する一方で、選手間の体罰(上級生から下級生への体罰)は急速に減少していることを明らかにした。少子化に伴う競技人口の減少により、選手間の競争が緩和されてきたことがその要因となっているものと思われる。

6) スポーツ界での体罰をなくすためには、1チームの選手数の適正化、大会で複数チームの出場の容認、寮・合宿所の廃止・環境の改善、部員・選手が移籍しやすいルール作りなどの施策が有効あることを指摘した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 中村哲也	4. 巻 19
2. 論文標題 日本の大学におけるスポーツサークルの誕生と拡大：高度成長期の早稲田大学を中心にして	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 スポーツ科学研究	6. 最初と最後の頁 84-118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 田所明憲・中村哲也
2. 発表標題 NPBと独立リーグにおけるセカンドキャリアの現状と課題 ～四国アイランドリーグplusとBCリーグ調査結果を踏まえて～
3. 学会等名 野球文化学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中村哲也・近藤雄大・崎田嘉寛
2. 発表標題 野球の打撃・投球動作の技術史研究 - 1951年オールスター戦動画の川上哲治・金田正一を事例として
3. 学会等名 体育史学会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 広尾 晃	4. 発行年 2023年
2. 出版社 彩流社	5. 総ページ数 344
3. 書名 野球独立リーグの教科書	

1. 著者名 アロン・L・ミラー、石井 昌幸、坂元 正樹、志村 真幸、中田浩司、中村哲也	4. 発行年 2021年
2. 出版社 共和国	5. 総ページ数 404
3. 書名 日本の体罰	

1. 著者名 中村哲也	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ベースボール・マガジン社	5. 総ページ数 328
3. 書名 部活動学 子どもが主体のよりよいクラブをつくる24の視点(神谷拓)、第5章、運動部の歴史から自治と体罰を考える	

1. 著者名 中村哲也	4. 発行年 2020年
2. 出版社 かがわ出版	5. 総ページ数 240
3. 書名 子ども白書2020(日本子どもを守る会)、トピック、小中高で野球の投球制限	

1. 著者名 中村哲也	4. 発行年 2023年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 264
3. 書名 体罰と日本野球 歴史からの検証	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------